

講演・シンポジウム 抄録

ベイズ統計学と心理学

講演者：繁榊算男（帝京大学）

司会：清水和秋（関西大学）

1. 企画主旨

もはや昔の話になってしまったが、講演者が「ベイズ統計入門」という名称の書籍を出版したのは1985年である。当時はベイズ統計学の影響力が大きかったとは言えない。その後30年以上が経過し、ベイズ統計学は、ビッグデータの解析のスタンダードとして世間の注目を浴びる存在になっている。この間の顕著な進展は、数値的解法の発展である。ベイズ統計学では、統計モデルに含まれるパラメータや、将来の観測値、モデル自体の信憑性などは、すべてデータによって学習した結果の事後分布によって示される。ある意味では皮肉なことにこの事後分布を数式的に書くことは容易である(ただ、事前分布と尤度を掛け合わせればよい)が、その事後分布から情報を取り出す作業が問題であった。しかし、数値解析手法の現代化によって、事後分布の評価がむしろ手軽にできるようになっている。もう一つの進展は、ベイズ分析が対応するモデルの複雑化、多様化である。モデルを階層的に構築することによって、現象に適切なレベルの複雑さを持つモデルを自在に作ることができる。モデルの階層化とは次のようなステップである。従属変数として観測される心理的現象を説明するために、観測される独立変数をモデルに導入する。独立変数と従属変数をつなぐためのパラメータを導入する。このパラメータの事前分布をモデルに組み込む。心理学では、個人差を表現する、観測されない変数を説明のために導入することが多い。この潜在変数の母集団の分布もモデルに組み入れる。これらのステップを通じて構築されるモデルは、いくら複雑であっても、モデルに含まれる不確実性を事後分布によって評価することが可能である。心理学では、統計的有意性検定に対する疑義は古くから議論されている。素朴に考えても、観測数が多くなれば、帰無仮説は必ず棄却され、対立仮説が採択されることは、観測の精度を高めれば高めるほど、自分の仮説が通りやすいことを意味しており、通常の科学の

方法論として受け入れがたい。伝統的な仮説検定は、帰無仮説と対立仮説のどちらをとるかという決定問題として定式化されている。帰無仮説とは、英語では **null hypothesis** であるが、もともと無に帰するような仮説を評価する価値はない。心理学においては、意味のある仮説を検証すべきである。もともと、心理学的測定は、構成概念の測定値であることが多く、その数値の原点や単位にはそれほど意味がない。とすると、仮説としては、ふたつの測定値の差がプラスかマイナスか、相関がプラスかマイナスかなどが関心対象となろう。これらは確率で評価できるし、プラスとなる確率とマイナスとなる確率との比をとるのも有意味であろう。

当日の講演では、ベイズ統計学が心理学に与える影響を仮説検定だけではなく、いくつかのトピックについて考察する。

2. 講演者略歴

東北大学教育学部、東京工業大学工学部、総合理工学研究科、東京大学総合文化研究科、帝京大学文学部で教鞭をとる。International Meeting of Psychometric Society (IMPS) 実行委員長、International Congress of Psychology (ICP)組織委員会委員長など。

3. 主要業績

本講演と関連のある書物として、ベイズ統計入門（東大出版会）、仮説の統計的評価とベイズ統計学（佐伯、松原編、実践としての統計学（東大出版会）第4章）、意思決定の認知統計学（朝倉書店）がある。

Personality and Health (パーソナリティと健康の関連)

講演者：Antonio Terracciano (フロリダ州立大学)

司 会：小塩真司 (早稲田大学)

企 画：国際交流委員会

1. 企画主旨

The international consensus on the five major dimensions of personality has catalyzed the growth of personality research, especially at the intersection with cross-cultural and health psychology. Personality traits are predictive of important outcomes, including health-risk behaviors (e.g., cigarette smoking, sedentary behaviors) and diseases (e.g., chronic obstructive pulmonary disease, Alzheimer's disease). All five traits have been related to health, but the most consistent associations are found with Conscientiousness. The associations with Neuroticism are less consistent, but stronger for mental health conditions, such as major depression. The study of intermediate clinical and biomarker data (e.g., inflammatory markers, BDNF) point to some of the mechanisms underlying the association between personality and health outcomes. The associations with biomarkers further inform theories of personality and increase knowledge on the biological roots of personality. These associations are not unidirectional. Growing evidence indicate that bio-medical conditions have an impact on personality development: Inflammatory, metabolic, and other physiological dysregulations are associated with undesirable changes in personality. Changes in personality seem particularly striking with neurodegenerative diseases in older adults. These studies provide insights into factors that moderate personality development and contribute to individual differences. Future research should emphasize international studies to test cultural factors as moderators of the associations between personality and health.

2. 講演者略歴

アントニオ・テラシアーノ准教授は、1999年にイタリアの Second University of Naples で学位を取得後、1999年より米国 National Institutes of Health (NIH) の National Institute on Aging で Visiting Fellow, その後 Research Fellow, Staff Scientist を勤め、現在はフロリダ州立大学で教鞭をとられています。また 2006年にはイタリアのカリアリ大学でも学位を取得されています。この 10年間だけでも 100 本以上の論文を出版しており、近年精力的な研究活動を積み重ねている若手心理学者のひとりです。

テラシアーノ先生の研究は、Big Five パーソナリティを中心としながらも、文化比較、生涯発達、長寿、遺伝子、身体・精神的病理や健康関連行動など多岐にわたります。本講演では、Big Five パーソナリティと特に身体面の機能や健康との関連について、最新の研究知見を交えて議論していただく予定です。

3. 研究業績

テラシアーノ先生の研究業績に関しては、フロリダ州立大学の web ページや Google Scholar をご参照ください。

<http://med.fsu.edu/index.cfm?fuseaction=directory.full&usemenu=&usetemplate=column&directoryID=16780>

<https://scholar.google.com/citations?user=iDMRssYAAA&hl=ja>

※本講演は英語で行われます。和訳資料等を用意する予定です。

調査・解析・尺度構成という操作が作り出す artifacts

—解決方法の現在—

講師：清水 和秋（関西大学社会学部）

1. 企画主旨

心理測定法は、古典的な方法と新しい提案とが混在したままに展開してきた。因子分析法と項目反応理論のように、目的とするところは同じであるのに、平行線上にある独立した方法であると見做されるものもある。方法が革新される過程では、方法に内在する問題点の指摘とその解決の提案が、既存の方法を批判する中で展開される。このような議論は問題の所在や改善点を明らかにすることにはなるが、否定的なイメージだけがその後に残ることもある。データ解析で使用できるソフトウェアには、新旧の理論がいろいろな形で埋め込まれながら版を重ねている。このため研究の現場では、どの方法を使えば良いのかという戸惑いが起きているのではないだろうか。結果として、より誤りが少ない方法として、伝統的なやり方を使うという保守的な判断につながっているのではないだろうか。

新しい方法を使うことに躊躇を感じることは、その方法が斬新であれば、歴史的にみても当然のことかもしれない。たとえば、因子分析の創成期、Anastasi(1938)とThurstone(1938)との間で抽出された因子の心理学的意味をめぐる論争があった。因子を *mathematical artifacts* とする論に対して、Thurstone は、セントロイド法あるいは主因子法によって得られた因子を *mathematical artifacts* とし、因子の心理学的意味は単純構造を基準とした回転により得られることを強調している。*artifact* は、訳語として「人工物」が当てられることが多い（印東, 1970）。大橋(1960)が「解釈上のあやまち (*artifact*)」としているように、どちらかと言えば、誤って作り上げられたというイメージで使われてきた。Anastasi と Thurstone の論争以降、因子数の決定・因子軸の回転などが「適切」でないことによって作り出される因子を *statistical-methodological artifacts* ということもある（Shimizu et al., 1988）。

因子分析での *artifacts* の論争は、構造方程式モデリングでの自由・固定・拘束パラメータの推定と適合度の確認という新しい方法を因子的不変性の検討に応用することにより、過去のものとなった(Mulaik, 1986)。exploratory factor

analysis で、因子数の決定や因子軸の回転が不適切に行われたとしても、confirmatory factor analysis や multi-group simultaneous analysis により因子的不変性(factorial invariance)を確認することによって、不適切な操作によって起きた混乱を收拾することができるからである(Vandenberg & Lance, 2000)。

研究の最前線では、最新の方法論理論とそれが搭載されているソフトにより、構成概念の追求と尺度の構成などが行われている。しかしながら、Richardson(1936)やGuilford(1953)が因子負荷量の推定値の代用方法として提案した手計算の時代の遺物に過ぎない I・T 相関が、項目分析を目的としていまだに使用されている。多変量正規分布を前提としていた最尤推定法には、正規性からの乖離にある程度の頑健性があることが報告されている(Boomsma, 1982)。そして、正規分布を条件としない漸近的分布非依存(Browne, 1984)やDWLS(Muthén et al., 1997)などが実際の研究で使用できる(繁樹, 1990; Shimizu et al., 1994)。このような方法があるにもかかわらず、天井効果・床効果を機械的に適用することによって質問項目が捨てられている。これもまた *artifacts* といえるのではないだろうか。

単純構造は全能でない。Bifactor 構造(Holzinger & Swineford, 1937)もまた因子分析の創成期に提案されていた。Bifactor 回転(Jennrich & Bentler, 2011)や信頼性の議論は因子分析だけではなく多次元項目反応理論においても行われている。縦断的データによる分析は、特性・状態の分離のように、構成概念そのものを根底から再検討することを迫っている(Geiser et al., 2015)。このような新しい動向を踏まえ、1)因子分析法（小包化、因子数、回転、尺度と信頼性 ω ）、2)多次元項目反応理論と因子分析、3)構造方程式モデリングの適合度とモデル、4)縦断データの解析（潜在成長、潜在差得点、特性・状態の分離）について、このチュートリアルでは、実際のデータを Amos, Mplus, R で分析し、それらの結果を PP と配付資料で示しながら、方法論の課題と現在できることが何かを具体的に紹介したい。

『助けを求めること』を助ける

—学校における援助要請カウンセリング—

講師：水野治久（大阪教育大学）

司会：佐藤 寛（関西学院大学）

1. 企画主旨

児童生徒がさまざまな心理社会的困難を抱えた際に、身近な他者や心理援助サービスを提供する専門家に助けを求めることは重要であることが知られています。一方で、周囲からもたらされるソーシャルサポートや専門家による心理学的支援は児童生徒の困難を解消する上で有用であるにもかかわらず、現実には困難を抱える児童生徒たちの多くがこうした援助資源を自ら利用しようとはしないことも報告されています。

この公開講座では、援助要請研究に関するわが国の第一人者として著名な水野治久先生をお招きし、学校心理学の観点から「学校における援助要請カウンセリング」について最新の知見を交えてご講演いただきます。「助けを求めること」を促すために私たちは学校において何ができるのか、水野先生にお話しをしていただきながら参加者の皆様と一緒に考えてまいりたいと思います。

パーソナリティ研究が精神医学の DSM-5 に与えたインパクト

企画者：大会準備委員会

司会者：守谷順（関西大学）

話題提供者：丹野義彦（東京大学総合文化研究科）

黒木俊秀（九州大学大学院人間環境学研究院）

木島伸彦（慶應義塾大学）

1. 企画主旨

パーソナリティ心理学が精神医学に与える影響力は十分にある。DSM-5 でのパーソナリティ障害の定義から、パーソナリティ研究の進展が精神科診断学に与えた影響が見て取れる。従来のカテゴリーカルな分類による診断基準と共に、代替 DSM-5 モデルとしてパーソナリティ特性と機能に基づく診断基準も付録に明記された。ここで挙げられたパーソナリティ特性には、外向性、同調性など 5 つの領域が示されており、まさにパーソナリティ心理学では広く信頼性・妥当性が示されているビッグファイブ理論を基礎としている。ビッグファイブの不適応的変異型が、パーソナリティ特性として診断基準に採用されている。蓄積されたパーソナリティ心理学の研究結果が、これまでの類型による分類から特性モデルへとこの流れを作ったのであろう。

実証的なパーソナリティ研究のデータが精神医学に与える影響が目に見えるようになった今、パーソナリティ心理学および精神医学の研究者をお呼びし、それぞれの立場からこの流れについてお話していただく。まず丹野先生から、パーソナリティ研究の中でもビッグファイブに焦点を当て、臨床との関わりを説明していただく。次に、精神医学の立場から黒木先生に、パーソナリティ研究の影響を精神医学でどう受け止められているかお話しいただく。最後にパーソナリティ心理学の立場から木島先生に、クロニンジャー理論から精神科診断学に与える影響について話していただく。

2. 話題提供者の要旨

2.1. 総合科学としての性格 5 因子パラダイム： ビッグ 5 の臨床的ポテンシャルを引き出そう

丹野義彦（東京大学総合文化研究科）

パーソナリティの科学とは、「個人差」の科学である。

個人差の記述・メカニズム・変化などについて科学的に調べるのが目的である。これまでのパーソナリティ心理学は、①統計学的手法を用いた記述や分類が主であり、②理論の互いの関係についての関心が薄かった。これに対し、性格五因子論（ビッグファイブ）の利点は、①個人差の心理学的実体を明らかにできること、②これまで無関係に研究されてきた生物学・心理学・社会学の研究が統合されることである。ビッグファイブは学際科学のひとつのパラダイムとして成長した。

ビッグファイブの研究は、臨床にも多くの示唆を与える。第 1 は、異常心理学の理解である。パーソナリティ障害とビッグファイブの研究は大きく進歩し、DSM-5 で取りあげられた。自閉症や ADHD などの発達障害もパーソナリティと強く関係している。

第 2 に、心理療法についても多くの示唆を与える。これまでの心理療法は、神経症傾向（N）との戦いだっただといえる。行動療法も認知療法もクライアント中心療法もネガティブ情動性をどのように対処するかの方法であった。逆に言えば、神経症傾向（N）以外の精神病理には効果がない。

第 3 に、新たな心理療法の技法の開発に役立つ。ユングは、内向性と外向性のバランスが崩れることから精神病理が生じるとして、バランスを回復することが大切だとした。ビッグ 5 からみると、こうした考えは、内向・外向だけでなく、他の次元でも当てはまる。開放性（O）における独創性と平凡、協調性（A）における協調性と分離性、統制性（C）における統制性と衝動性は、誰もが体験する葛藤である。こうしたバランスを回復する技法は重要であろう。また、「心の理論」の能力を高める訓練によって、自閉症を治療する試みも出てきた。

ビッグファイブの持つ臨床的ポテンシャルをもっと引き出していきたい。

2.2. DSM-5におけるパーソナリティ障害の構造

黒木俊秀（九州大学大学院人間環境学研究院）

20世紀後半の計量心理学の発展は、DSM-III (1980)以降の精神科診断学に決定的な影響を与えてきた。DSM-5 (2013)の開発段階においては、ビッグファイブに代表される今日のパーソナリティ心理学の進歩に呼応して、従来のパーソナリティ障害のカテゴリー的モデルを全面的に見直すことが提言された。すなわち、カテゴリー的に分類されてきたパーソナリティ障害もビッグファイブによってディメンジョン的に捉えるほうが妥当であることが示唆されてきた。事実、2011年に発表されたDSM-5のドラフトでは、ビッグファイブに対応する病的パーソナリティ特性の5領域にもとづくディメンジョン的モデルとDSM-IVのカテゴリー的モデルを併せたハイブリッド・モデルが提案された。このモデルの開発に貢献したKruegerらのグループは、病的パーソナリティ特性のディメンジョンとDSMの精神障害群との間には構造的な対応関係が存在することを示唆している。しかしながら、こうしたパーソナリティ心理学のモデルの採用に対する臨床医の反発は強く、DSM-5の最終版では見送られた。とはいえ、DSM-5の開発者たちは、上述のハイブリッド・モデル（マニュアルの第III部に記載）の妥当性と有用性を強く確信しており、今後の研究に応用することを奨励している。かくてパーソナリティ特性と精神疾患の構造的関連の解明は、現在、精神科診断学の最も重要なテーマであり、基礎と臨床の研究者の連携が必須となろう。

引用文献

黒木俊秀 (2014) 精神科診断におけるディメンジョン的アプローチとは何だろうか？臨床精神病理、35、179-188.

2.3. DSMとクロニンジャーのパーソナリティ理論

木島伸彦（慶應義塾大学）

クロニンジャーのパーソナリティ心理学理論の視点から、パーソナリティ心理学がDSMのパーソナリティ障害のシステムにどう貢献できるのかを紹介する。

精神科診断は、RDC等が起源とするDSMやICDのシステムで高い信頼性を得られるようになったと評価されている。しかし、様々な理論の相違があり、また、エビデンス自体も昨今の製薬会社の影響で、製薬会社に

利益をもたらす研究に傾いているという指摘もあり、妥当性については論争が絶えない。クロニンジャーは、最も良く用いられているビッグファイブ理論ではなく、自身の理論を用いて、精神科診断の妥当性を高め、精神的な異常状態と健康状態を記述するために、パーソナリティ理論を援用することを提言している。

クロニンジャー理論によると、パーソナリティとは、「適応のために個人が学習する特有の方法」であると定義しており、学習には、手続き学習、意味学習、自覚学習の3種類があるとしている。この考えに基づき、パーソナリティの構造、機能、進化、発達が記述でき、さらにそこから、独自の気質と性格のモデルが提唱されている。このモデルは、通常のものとは異なり、還元的ではなく、統合的である。ビッグファイブ理論では、因子分析に基づき、5つの下位尺度をそれぞれ独立したものとして扱っているが、パーソナリティには本来3つの学習と気質と性格という構成体があり、それぞれ遺伝的影響、脳機能回路、学習と適応の役割が異なっている。ビッグファイブの下位尺度を同等に扱うと、例えば、不安障害とパーソナリティ障害との違いをうまく説明できないことになってしまう。

本報告では、クロニンジャーの提言を紹介し、DSMにおけるビッグファイブ理論の役割を批判的に検討することで、議論をより深めることを目指したい。

大阪の笑いを探る

—ぼけとつっこみ—

企画者・司会者：雨宮俊彦（関西大学社会学部・なにわ大阪研究センター共同研究員）

共催：関西大学なにわ大阪研究センター特別研究「なにわ大阪の『笑い』に関する調査と研究」

話題提供者：森下伸也（関西大学人間健康学部・なにわ大阪研究センター共同研究員）

藤田曜（漫才作家）

指定討論者：野村亮太（東京大学大学院教育学研究科）

1. 企画主旨

大阪は、日本における笑いの都として広く知られている(井上,1991)。McGraw & Warner(2014)では、ユーモアに関する最新理論のひとつとして注目されている無害逸脱理論（雨宮,2016）の解説を柱に世界各国の笑いが紹介されている。紹介されるのは、デンマークでのムハマンド風刺画事件やタンザニアにおける笑い感染の真相など興味深いものばかりだが、日本は世界の他のどことも違うユーモア・センスの国として「ユーモアとロスト・イン・トランスレーション」の章で紹介されている。

McGrawらは、まず笑いの都大阪に上陸し、日本笑い学会の創設者の井上先生から大阪の笑いについて講義をうけ、街に出るが、こんな感想を述べている。「たしかに、人々はとてもフレンドリーだ。が、大阪人は本当に笑うのだろうか？こうして通りに立っている限り、その兆候はほとんど見られない。・・・大声も、咳払いも、口論も、携帯電話に向かってまくしたてる声も、子どもたちのお喋りも——そして何より、笑いもなかった。」(p.185)McGrawらの記述は、大阪というよりも日本の初印象にすぎないかもしれない。日本国内をより組織的に比較すればどうなるだろうか？

大平(2012)は、「あなたは、声を出して笑うことがどの程度ありますか？」という質問項目について、秋田と大阪で2,680名の成人男女（平均年齢58歳）を対象に調査を行った結果を報告している。回答は、「ほぼ毎日声を出して笑う、週に1回から5回程度声を出して笑う、月に1回から3回程度声を出して笑う、声を出して笑うことはほとんどない」の4件法である。毎日声を出して笑っている人は、男性で42%、女性で52%だった。一般のイメージどおり、女性の方がより多く笑っていることがわかる。秋田と大阪で比較してみると、男性の場合、毎日声を出して笑っている人は秋田が43%、大阪が

42%で地域差はなかった。一方女性の場合は、秋田が47%、大阪が55%で大阪の女性の方がより多く笑っていることが示された。大阪のおばちゃんがよく笑うというイメージは事実らしいが、大阪のおっちゃんについてはイメージとは異なるらしい。

ユーモア尺度を用いた研究もある。谷・大坊(2008)は、牧野(1998)のユーモア・センス尺度を用いて、攻撃的ユーモアと遊戯的ユーモアの地域比較をしている。対象は関西の大学生202名と関東の大学生357名である。最も長く住んだ地域を基準に比較すると、攻撃的ユーモア、遊戯的ユーモアともに関西、関東に有意な得点の差はなかった。一方、現在住んでいる地域で比較すると、関東の方が関西より遊戯的ユーモアの得点が有意に高いというやや意外な結果になった。

心理学における笑いやユーモアの地域比較研究は、ごく僅かしかないが、質問紙による国内比較では、笑いの都大阪のイメージを裏付ける結果は得られていないようだ。唯一イメージと合致する結果は、大阪のおばちゃんだが、これに関連して大平(2012)は、笑う頻度には会話頻度が影響するのではと述べている。

作者としてしゃべくり漫才確立を担った秋田実の評伝を書いた富岡多恵子は鶴見(2000)の後書きで、「わたしは大阪を離れ他国に住んですでに四十年近くになるが、その間いちばんツライと思ったのは大阪語での「じゃれ合い」が日常にきわめて少なくなってしまったことだった。」(p.293)と書いている（ここで富岡の言う他国は静岡のことである）。McGrawらも、街角から吉本へと観察の場を移して、大阪の笑いを探っている。大阪の笑いをとらえるには、大阪における日常会話と漫才の関連に焦点をあてる必要があるようだ。

しゃべくり漫才は、横山エンタツ・花菱アチャコのコンビと作者秋田実が中心となり、昭和の初めにそれまで

の音楽などを交えた音曲漫才から大阪で成立した。万歳が漫才と変わったのも昭和初期である。万歳は文字通りお祝いで、三河万歳など各地に残っている祝いの笑芸である。万歳は、立派な身なりで扇子を持った太夫と鼓を持った才蔵というキャラの組み合わせで演じられるが、これは今日の漫才におけるつつこみ（太夫）とぼけ（才蔵）に継承されている（鶴見,2000）。

秋田実は漫才と日常会話の連続性を明確に意識し、こう書いている。「漫才の笑いは、言葉と言ひ廻しによる面白さが中心で、二人の人間の立ち話である。雑談といってもいいし、無駄話でも世間話でもかまわない。」（井上,1991より、p.213）さらに、鶴見(2000)は、ぼけとつつこみという話芸の社会的意味について、太夫と才蔵のキャラに注目しこう書いている。「あほの相互性の確認への動きが、太夫・才蔵の話芸の核心にあり、それは、たえずわれわれがそれをことあたらしく自分たちの中で掘りおこななければ、私たちの文化の人間性があやうくなるほどに重要な主題である。」（pp.282-283）

落語には上方落語もあるが、西の漫才、東の落語という対比は可能だろう。漫才を落語と比較すると、発話の人称性とキャラ設定が対照的である。落語は、一人の話者による語り、会話も語りの中で行われ、古典落語にはキャラのスターシステムがあり、日常会話との距離は大きい。一方、漫才は二人の会話で、演者がそのままキャラとなり、日常会話との距離は小さい。大阪言葉には、「ねん」などの語尾使用や定型的会話フレーズなど、モノローグ的ではない相互性が豊富にあり、漫才にはこうした大阪言葉の特徴が反映していると考えられる。

以上のような問題認識のもと、本シンポジウムでは、大阪の笑いについて社会的観点と漫才作者の立場からの話題提供を行い、これをうけて落語とも比較しながら心理学的研究の方向性について討論する。

2. 話題提供者の要旨

2.1.大阪の笑いの文明論的位置づけ

日本笑い学会の会長として、日本の笑いに関する文明論的な位置づけを活発に行ってきた森下伸也氏（森下, 1996,2003,2010）が、漫才や大阪の笑いについて、ノモスとカオスといった社会的視点から巨視的な位置づけを提供する。

2.2.漫才と日常会話の関係

秋田実の孫で漫才作家の藤田曜氏（藤田,2010,2016）

が、作家としてのまた漫才作成指導の豊富な経験をふまえ、漫才と日常会話の関係について解説する。

以上の話題提供を踏まえ、笑いや落語についての心理学研究を活発に展開し、落語の演者でもある野村亮太氏（野村,2016a,b）が、落語と漫才の比較、心理学的研究への展開の方向性について討論する。

引用文献

- 雨宮俊彦(2016). 笑いとユーモアの心理学—何が可笑しいの? ミネルヴァ書房
- 井上宏(1991). 大阪の笑い 関西大学出版部
- 藤田曜(2010). 漫才のつくり方—漫才台本ってどうやってつくるのか 木村洋二(編) 笑いを科学する—ユーモア・サイエンスへの招待 (pp.114-118) 新曜社
- 藤田曜(2016).漫才くらぶ DRILL&DRILL (<http://www.fujita-akira.com/>)
- 牧野幸志(1998). ユーモア・センス尺度の作成. 広島大学教育学部紀要 第一部 心理学, 47, 37-46.
- McGraw, P., & Warner, J. (2014). *The humor code: A global search for what makes things funny*. Simon and Schuster.(柴田さとみ(訳) (2015), 世界“笑いのツボ” 探し CCC メディアハウス)
- 森下伸也(1996). 笑いの社会学 世界思想社
- 森下伸也(2003). もっと笑うためのユーモア学入門 新曜社
- 森下伸也(2010). 笑いの花咲く国へ—笑いの東西文明論 序説 木村洋二(編) 笑いを科学する—ユーモア・サイエンスへの招待 (pp.25-42) 新曜社
- 野村亮太(2016a). 口下手な人は知らない話し方の極意—認知科学で「話術」を磨く 集英社新書
- 野村亮太(2016b). やわらかな知性—認知科学から見た落語 (<http://dze.ro/columns/series/yawaraka>)
- 大平哲也(2012). 「笑い」はどうやって測定するの? 笑いの測定法について, 公衆衛生, 76,407-411.
- 谷忠邦・大坊郁夫(2008). ユーモアと社会心理学的変数との関連についての基礎的研究. 対人社会心理学研究, 8, 129-137.
- 鶴見俊輔(2000). 太夫才蔵伝—漫才をつらぬくもの 平凡社ライブラリー

文化とパーソナリティ

—心理学 その境界を越えて—

企画者：日本パーソナリティ心理学会第25回大会準備委員会・北村英哉（関西大学）

司会者：北村英哉（関西大学）

話題提供者：池内裕美（関西大学）

話題提供者：梅屋 潔（神戸大学）

話題提供者：北村英哉（関西大学）

1. 企画主旨

文化と心理／行動との関係は、Markus & Kitayama(1991)以来、その論争も含めて大きく進展してきた。今や日米を単に比べるという比較的視点を脱して、関係流動性や経済・取り引き的な下部構造などを含めてより根源的な因果連鎖を掘み取ろうと生態学的なアプローチも盛んである。

さらに海流や地理的位置や地理的条件などが気候と相俟って、いかなる生活様式を作り上げるかの指摘も現れている（北村，2016）。また、国内においても日々直面している課題が異なる職業による違い、また、宗教の影響も心理傾向に対して無視できない影響を及ぼしており、国・民族を越えた原因図式を特定することが重要であることが明らかになってきた。

一方、そうした生態学的条件に基づいて日本（の一部）に古くから持続するアニミズム的な思考様式が日本的宗教の歴史と現状の影響と相俟って、一定の思考様式や感情反応の特徴、感情表出のあり方などに対して影響を及ぼしていることも確かである。

しかしながら、企画者自身含めて、社会心理学者たちは、その仮説構成において乏しい知識から周囲の他領域からの知見や常識を十分活用しそこなって基礎的な誤謬を冒すようなこともしばしばあるだろう。

人間の文化的・社会的営みについては民俗学、文化人類学、社会人類学、宗教人類学など参照すべき知見は山ほどある。今回の企画では、社会人類学者として、アフリカのいくつかの民族について豊かな知見を持ち、なおかつ日本国内においても数多くのフィールドワークをこなされている梅屋先生（神戸大学）をお迎えして本格的な文化と人間の問題について捉え直しを行ってみたい。

また、社会心理学者として異色の観点からモノの問題

にこだわり、アニミズム的思考が日本独特のモノへの執着の仕方にいかに表れるか、計量的調査研究と共に、人形供養のフィールド調査やゴミ屋敷のフィールド調査などにおいても活躍されておられる池内先生（関西大学）にご登壇いただき、北村の研究成果、アイデアと共に議論を行っていききたい。

ここでは、狭いパーソナリティ概念にとどまることなく（本来狭くないが）、またパーソナリティなのかということは斟酌せずに自由に人々のその社会での思考様式・行動様式の特徴などを捉えていきたい。

指定討論を置かずフロアのみなさまからの率直なご意見をぜひ多く伺いたく、討論時間をとりたいと考えている。

参考文献 Markus & Kitayama(1991). Culture and the self. *Psychological Review*, 98, 224-253. 山岸 俊男 (1999). 安心社会から信頼社会へ 中央公論新社

2. 話題提供者の要旨

2.1. モノの死を悼む心：日本人のアニミズム的思考とモノ供養

池内 裕美（関西大学）

「モノ供養」という儀式をご存じだろうか。いわゆる「モノのお葬式」である。古来より八百万の神として自然物を崇拝してきた日本人には、所有物に対しても生命の存在を感じる独特のアニミズム的な心性が宿っている。ゆえに日本人は所定の役目を終えたモノに対し、感謝の意を持って弔うようになった。それがモノ供養である。

本報告では、日本人に深く根ざすアニミズム的思考の観点から、日本人特有のモノの死を悼む心に接

近する。より具体的には、古くは人形供養から近年の AIBO 供養にいたるまで、モノ供養が生まれた心理的・社会的背景について自らの実証研究 (e.g., 池内, 2010 ; 池内, 2014) を基に考察する。

なお、こうしたアニミズム的世界観は、人類学者の Tylor (1871) や心理学者の Piaget (1929) が原始的思考として見なしたように、一神教的世界観を持つ西欧社会では低く評価されてきた。しかし、日本社会では今も確実にこの心性は受け継がれ、芸術や文化、経済活動などに息づいている。本報告が、日本人の心や文化の形成に多大なる影響を及ぼした、この古くて新しい「アニミズム」概念を、今一度見直す機会となることを期待する。

引用文献 池内裕美 (2010). 成人のアニミズム的思考: 自発的喪失としてのモノ供養の心理, 社心研, 25, 167-177. 池内裕美 (2014). 人はなぜモノを溜め込むのか: ホーディング傾向尺度の作成とアニミズムとの関連性の検討, 社心研, 30, 86-98.

2.2. 人類学的関心と思想のクロスロード—アニミズム、存在論、そしてエージェンシー

梅屋 潔 (神戸大学)

管見の限り、精神医学と考古学ではいくつか注目すべき用法がみられるものの、その概念が立ち上がってきたはずの文化・社会人類学においては、アニミズムの語は今世紀に入って使用頻度を下げてきた。おそらく正面切った多角的なアニミズム概念の検討は、Bird-David [1999] や Stringer [1999] が起こした論争が最後だろう。しかし、そのことは、人類学がその問題系と対峙しなくなったことを意味しない。実情はむしろ逆で、agency、personhood そして ontology などの語彙に読み替えられて、むしろ人類学と現代思想のホットな「流行」の中心のひとつを形成しているといってもよい。そこでは、主に熱帯雨林の狩猟採集民を主たる対象とする研究者 (Descola や Viveiros de Castro などのような) の研究の理論とその解釈を中心に展開を見せているのである。本報告では、このような流行からやや距離を置いた報告者が、それらの流れをどのように見ているのかを紹介しながら、かつてならアニミズムと呼ばれていた

た対象が現在はいったいどのような語彙で語られるのかを考えてみることにしたい。

引用文献

Bird-David, N. 1999 'Animism' Revisited: Personhood, Environment, and Relational Epistemology. *Current Anthropology*. Vol. 40.
Stringer, M.D. 1999 Rethinking Animism: Thought from the Infancy of Our Discipline. *The Journal of the Royal Anthropological Institute*, Vol.5, No.4. 541-555. Latour, B. 2009 Perspectivism: 'Type' or 'Bomb'? *Anthropology Today*. Vol. 25, No. 2. 1-2.
Viveiros de Castro, E. 1992 *From the Enemy's Point of View: Humanity and Divinity in an Amazonian Society*. Chicago: University of Chicago Press.
Descola, Phillippe 2013, *Beyond Nature and Culture*. Chicago: University of Chicago Press.

2.3. 恨み・不和忌避と恐怖・嫌悪感情

北村 英哉 (関西大学)

日本では主に江戸時代の農村社会などにおいて関係流動性が低く、見知った者の間で暮らす場合、その適応方略としては協調を重んじ、周囲に気を配る方法が適応価値が高かった。円滑な協力を優先するためには自己主張は控え気味で和を乱さないでいる方が効率的となる。さらに争い事は悪い「気」を呼び寄せる他、自己主張の結果自分の意思が通ったとしても屈服した側に「恨み」が残る。恨みを残すのも雰囲気悪くするひとつであり、恨みを怖れる(恨み忌避)ことも一種の適応方略と言えた。

人の恨みによって「悪いことが起こる(佐藤・北村,2015)」と考えることは俗信としての怨霊信仰からつながって来ているものであると考えられる。人間関係の問題を各社会がどう処理し得て、御霊信仰のようなものが日本社会にどのような特徴を与えたかを生態学—心理—社会的観点から考えてみたい。一方、こうした信仰の基盤になるものは世界各国にも見られ、共通部分と日本独自の部分をいかに考えていくかが課題となる。

引用文献 井本英一 (2002). 穢れと聖性 法政大学出版局
Douglas, M. 塚本利明訳 (2009). 汚穢と禁忌 筑摩書房

パーソナリティとは何か

—概念，歴史，測定をめぐって—

企画者：日本パーソナリティ心理学会第25回大会準備委員会

コーディネーター：木戸彩恵（関西大学）

司会者：尾見康博（山梨大学）

話題提供者：渡邊芳之（帯広畜産大学）・サトウタツヤ（立命館大学）

指定討論者：小塩真司（早稲田大学）

1. 企画主旨

2015年から2016年にかけての短い間に、日本のパーソナリティ心理学界は3人の偉大な先達を相次いで失った。大村政男先生、星野命先生、そして藤永保先生である。3人のパーソナリティ心理学への貢献、またわれわれの学会への貢献を数え上げればきりが無いが、先生方に共通していたのは常に「パーソナリティ心理学のそもそも論」を語っておられたことである。

パーソナリティとはそもそも何か、パーソナリティの概念はどのような性質を持っているか、パーソナリティの測定はどのようにあるべきか、そしてパーソナリティの研究がどうあるべきか、いまのパーソナリティ研究にはどのような問題があるか、といった問題について、三先生は時あるごとに長い経験に基づいた考えをわれわれに示してくださった。先生方こうした警咳に接した経験をもつ者は、ある世代より上の会員には多いと思う。

われわれは三先生からの教えをどのように受け継いでいくことができるだろうか。そのひとつの道は「パーソナリティ心理学のそもそも論」をこれからも語り続けていくことにあると思う。パーソナリティ心理学は長い論争の時代を経て、さまざまな遺伝指標や脳科学的指標の活用、ビッグファイブの特性論、パーソナリティ概念の行動予測力や多彩な指標との相関などを基盤にふたたび活況を呈しているが、そうした変化はパーソナリティ概念が「役に立つ」「便利である」という実用性に支えられている。しかし一方で、肝心のパーソナリティ概念は十年一日のごとく質問紙尺度によって測定されているし、論争の時代に議論された問題点は実際にはなんにも解決されてはならず、これからもことあるごとに蒸し返されるだろう。

2015年度の第24回日本パーソナリティ心理学会（北海道教育大学）におけるシンポジウム「雑談：これからのパーソナリティ心理学—学会24年を振り返り、今後を展望する—」（企画者：日本パーソナリティ心理学会経常的研究交流委員会）では、フロアの若い会員から「パーソナリティのそもそも論を聞くチャンスがない、そもそも論をもっと聞きたい」という声があった。それに力を得た渡邊（日本パーソナリティ心理学会理事長）は（株）ちとせプレスとの共同企画として小塩真司と「パーソナリティのそもそも論をしよう」という対談を行った。その場に初代理事長の詫摩武俊先生が現れて議論に参加していただいたことは議論の幅を厚くした（渡邊・小塩・北村・詫摩，2016）。ただ、座談形式もいいが、きちんとした話題提供を基にしたシンポジウム形式での「そもそも論」も聞きたい、という声も聞こえていた。

そこで今回は、「パーソナリティ心理学のそもそも論対談」の学会大会編ということで、渡邊に加えて、渡邊と同様に学会設立時から大村、星野、藤永各先生の助言を受け、とくにパーソナリティ心理学の歴史、方法について研究してきたサトウタツヤを加えて、「パーソナリティとはなにか」について考えていきたい。

小塩は指定討論者として、二人の話題提供の議論を深める。さらにフロアの会員からもどんどん発言をいただき、パーソナリティ心理学のそもそも論を活発に語ることができたらよいと思っている。

【引用文献】

渡邊芳之・小塩真司・北村英哉・詫摩武俊 2016 パーソナリティのそもそも論をしよう サイナビ！ブックレット Vol.9 ちとせプレス

<http://chitosepress.com/2016/03/07/1348/>

2. 話題提供者の要旨

2.1. パーソナリティとはなんだったのか

渡邊芳之（帯広畜産大学）

パーソナリティにかかわる概念の理論的・方法論的な性質と、それらの概念の心理学的な用法について考える。

パーソナリティ概念の源泉が自己や他者の行動の観察であることは間違いなく、そこでは観察データが抽象化されたものとしてパーソナリティ概念が生まれる。こうした観察に完全に還元される概念を傾性概念（disposition concept）という。概念を用いて行動を記述したり、のちの行動を予測したりする目的では、パーソナリティ概念は傾性概念であればよい。しかしパーソナリティ概念から行動を原因論的に説明しようとするときには、概念は行動の観察に還元されない剰余意味をもつ理論的構成概念（theoretical construct）でなければならない。パーソナリティ概念と遺伝指標や生理学的指標、脳の機能が結びつけられることが多いのは、そのためである。

心理学では一般にパーソナリティ概念は理論的構成概念として用いられることが多いが、その際にパーソナリティ概念の指標となるデータは心理学的測定によって得られることが多い。しかし心理学的測定の手続きによって把握できるのは傾性概念だけであり、傾性概念としての測定データと理論的構成概念としてのパーソナリティ概念とは常に乖離が生じる。これはパーソナリティ心理学の方法論的な問題のうち最大のものの一つである。

広い意味でのパーソナリティ・アセスメントの信頼性と妥当性の問題、長く議論された「一貫性論争」「人か状況か論争」などの重要な問題の多くが、こうしたパーソナリティ概念とその把握についての方法論的な問題と深く結びついている（渡邊，2010）。シンポジウムではこれらの問題を概観した上で、より具体的なパーソナリティ概念の用法にみられる問題についても述べる。

【引用文献】

渡邊芳之 2010 性格とはなんだったのか～心理学と日常概念 新曜社

2.2. 歴史の中のパーソナリティ：WWⅡ終了まで

サトウタツヤ（立命館大学）

ヒポクラテスの体液病理学（紀元前4世紀頃）はガレノスによる集大成を経て、4つの体液のバランスが気質の違いを作るという四気質説としても確立された。例えば『サレルノ養生訓（12-13世紀）』に見られるようになった。その後、カントの『人間学（18世紀末）』における気質の分類にも影響を与え、さらに近代心理学の父・ヴントの気質論（19世紀末）に受け継がれた。

近代心理学が成立した時期は、宗教的世界観／人間観に科学が異議申し立てを始めた時期であり、魔女として扱われた現象が神経症や精神病として捉えられるようになったり、個人の進路選択が自由になり個性が重視されるようになった時期であった。前者について精神医学及び心理学はヒステリー研究を発端とし、19世紀末頃以降に二重人格（乖離）の研究（リボ、ジャネ）を行ったり、精神分析理論（フロイト）を打ち立てたりした。後者については、個人の能力、性格、適性などを捉えることが心理学に要請されるようになり、心理学者たちもその需要に応えた。実用的な知能検査（ビネ）、軍隊における神経症傾向者の抽出尺度（ウッドワース）など、人間の性質を一次元の量に換算して捉える潮流が現れた（20世紀初頭）。

さらに、精神医学においては、精神病の病前性格という考え方が重視され、1920年代には類型論として結実した。クレッチマーの身体と性格、ユングの内向性・外向性、などである。同じ時期、ロールシャッハ検査・文章完成法・TATなど、後に投影法と呼ばれる手法によって精神力動の個人差を捉える試みも始まった。バーンリューターによる多元的性格のインベントリーは、相関係数や因子分析の発展と共依存しつつMMPIやMPIなどにつながり性格の理論を豊富化した。ただし、測定における信頼性や妥当性の問題も惹起した。こうした状況で、性格の理論をまとめようとした代表的論者がG・オルポートであった。そして、精神分析や精神力動論に基づく性格理解、類型論的な理解、特性論的な理解、については1968年のミシェル『Personality and Assessment』によって根本的な疑問が呈されるようになり、「人か状況か論争」を迎えるのである。

Personality and Physical Health (パーソナリティと身体的健康)

企画 : 国際交流委員会

共催 : 東洋大学 HIRC21, 日本社会心理学会

司会者 : 堀毛一也 (東洋大学)

講演者 : Angelina Sutin (フロリダ州立大学)

話題提供者 : 榊原良太 (鹿児島大学),

川本哲也 (日本学術振興会・慶應義塾大学),

西田裕紀子 (国立研究開発法人国立長寿医療研究センター)

指定討論者 : Antonio Terracciano (フロリダ州立大学)

1. 企画主旨

パーソナリティは抽象的な構成概念であるが、近年では生活に密着した様々な行動・社会的活動、そしてそれらの結果に結びつくことが明らかにされている。このワークショップでは、特に身体的な健康に焦点を当て、議論を深める。

これまでの国外の研究知見では、とくに勤勉性(誠実性; Conscientiousness)が、各種の健康関連行動や長寿に結びつくことが示されてきてきた。そして多くの研究知見が蓄積される中で、多くのパーソナリティ特性が様々な健康関連行動にかかわることが明らかにされつつある。しかいながら、このような関連について国内の研究知見はまだ少なく、研究の蓄積が待たれている状況である。

このワークショップでは、まずパーソナリティと身体面の健康、特に肥満とのかかわりについて多くの研究成果を残している Angelina Sutin 氏に最新の研究知見について講演をいただく。その後、3名の研究者が日本における研究知見を報告する。榊原氏からは感情制御特性と心身の健康に関して、川本氏からはパーソナリティ特性の変化と身体的健康の変化の因果関係に関して、西田氏からは高齢者を対象とした多面的なデータからパーソナリティと身体的健康とのかかわりについて報告してもらい、日本における研究の現状を把握する。そしてさらに、Antonio Terracciano 氏も交えて、これらの研究知見の意義や今後の展望についてディスカッションを行う。

活発な議論が交わされる中で、パーソナリティが社会生活を通じて身体的健康とのかかわる様相について考察を深め、今後の研究の方向性を探る。

2. 講演要旨

2.1. Personality Traits and Health: The Case of Obesity

Angelina Sutin (フロリダ州立大学)

Obesity is a major cause of disease and disability worldwide. It has a complex etiology that includes psychological processes. Across several samples that varied in ethnicity, age, and socio-economic status, high Neuroticism and low Conscientiousness were associated with obesity risk. Physiological mechanisms and behavioral factors partly accounted for these relations. In addition, the association between personality and body weight is not unidirectional: personality is associated with weight gain and weight gain is associated with change in personality. This research highlights the role of personality in body weight and the mechanisms that lead from traits to this consequential health outcome.

3. 話題提供の要旨

3.1. 成人の感情制御特性と心身の健康

(Emotional regulation and physical/mental health among adults)

榊原良太 (鹿児島大学)

個人が自らの感情をいかに制御するかについては、用いられる方略とその頻度に、広範な個人差があることが知られている。従来、そうした個人の感情制御特性は、精神的健康の規定因として取り上げられることが多かった。一方、身体的健康への影響を検討した研究も、相

対的に少ないながら行われている。本発表では、まず、先行研究のレビュー、調査データの呈示を通じて、個人の感情制御特性が広く心身の健康へ与える影響について示す。その上で、近年関心が高まっているマインドフルネス、さらには日本独自の精神療法である森田療法などの視点から従来の知見を捉え、新たな試論を展開する。最終的に、個人の感情制御特性が「心」と「身体」に与える影響について、多様な視点から理解・議論を深めていくことの重要性を呈示したい。

3.2. 成人のパーソナリティ変化と身体的健康 (Personality change and physical health among adults)

川本哲也 (日本学術振興会・慶應義塾大学)

パーソナリティは配偶行動や寿命、精神的・身体的健康、ライフスタイルなど、人のライフコースに関する各種変数との関連が明らかにされている。近年はパーソナリティの変化と健康との関連も指摘されているが、こちらについてはいまだ知見も少なく、特に本邦における知見はほとんど見られない。そこで本研究は、成人のパーソナリティの変化と身体的健康の関連を検討することを目的に、30歳から50歳の日本人成人2,000人を対象に、1年間の短期縦断調査を実施した。その結果、成人のベースライン時点でのパーソナリティは1年後の身体疾患を有するリスクに影響しており、かつパーソナリティの変化も身体疾患を有するリスクと有意に関連することが示された。以上の結果から、日本人サンプルにおいてもパーソナリティとその変化が、私たちの身体面での健康と深く関連している可能性が示唆された。当日は、パーソナリティが私たちの健康なライフコースにおいてどのような機能性を持ちうるのかについて、議論を深めていきたい。

3.3. 人生後半期のパーソナリティと身体的健康：15年間の長期縦断研究 (NILS-LSA) より (Personality and physical health later in life: fifteen-years longitudinal study by NILS-LSA)

西田裕紀子

(国立研究開発法人国立長寿医療研究センター)

「国立長寿医療研究センター・老化に関する長期縦断疫学研究 (NILS-LSA)」は、日本人の老化・老年病に関する

学際的なプロジェクトである。1997年11月より、センター近隣の地域から無作為抽出された40歳～79歳(ベースライン時点)の約2300名を対象として、医学・心理学・運動生理学・身体組成学・栄養学などの多岐の分野にわたる縦断調査を実施してきた(約2年間隔・全8回)。パーソナリティ (NEO-FFI) のデータ収集は、第2次調査と第5次調査で行っている。今回の発表では、まず、日本国内の高齢者のパーソナリティと身体的健康に関する研究の動向を概観する。次に、NILS-LSAのデータを用いて、高齢期のパーソナリティとライフスタイル(食行動・運動習慣・余暇活動)及び身体的健康(主観的健康感・疾患既往)との関連を検討する。さらに、パーソナリティが身体的なエイジングを補償する効果(加齢に伴って聴力が低下しても、開放性が高い場合には、認知機能を維持できる、等)についても考えたい。

忘れられる？考えないようにできる？

—臨床心理学・社会心理学・認知心理学の観点から紐解く意図的抑制—

企画者：経常的研究交流委員会

司会者：石井国雄（清泉女学院大学）、服部陽介（京都学園大学）

話題提供者：長谷川 晃（東海学院大学）

田戸岡好香（東京大学・日本学術振興会）

小林正法（関西学院大学）

指定討論者：川口 潤（名古屋大学）

1. 企画主旨

失恋の経験を忘れたい。ダイエットをしているときにカロリーの高い食べ物のことを考えたくない。わたしたちはさまざまなことを忘れたい、考えたくないと思うことがある。こうした意図的な抑制の試みがもたらす結果やその成否に関わる要因について、これまで幅広い領域で多くの知見が積み重ねられてきた。そこで、本シンポジウムでは、臨床心理学、社会心理学、認知心理学の各領域で活躍されている先生方をお招きし、それぞれの視点から思考の反復とそれに対する意図的抑制について話題提供をしていただく。さらに、そこでお話しいただいた内容を整理し、意図的抑制についての理解を深めながら、研究の今後の展望について議論していく。

まず、臨床心理学の立場から、長谷川晃先生に、反すうとその発生に関わる個人差などの諸要因についてお話しいただく。次に、社会心理学の立場から、田戸岡好香先生に、思考の意図的抑制に伴って生じる現象とその発生メカニズムについてお話しいただく。その後、認知心理学の立場から、小林正法先生に、記憶の意図的抑制の成否と個人差についてお話しいただく。

また、指定討論者には記憶や思考の制御について幅広く研究をされている川口潤先生をお招きし、3名の話者提供者のご発表について質問・コメントをいただく。さらに、フロアの先生方からもご意見やご質問をいただきながら、意図的抑制の可否と意図的抑制を実現するための方法について議論していきたいと考えている。

2. 話題提供者の要旨

2.1. なぜ反すうを止められないと「考えられている」のか

長谷川 晃（東海学院大学）

反すうは抑うつ・うつ病や関連する心理的問題に関心を抱く多くの研究者によって盛んに研究がなされている。そして、多くの研究者が焦点を当てているのは、なぜ反すうしない一群が存在する一方、高頻度に生じる反すうに悩まされる者もいるのかという、個人差（特性）の問題である。

特性的な反すうとの関連を検討した研究では、概して思考抑制・思考対処方略を試みる人が多い個人は反すうしやすいという結果が得られている。また、反すうの意図的な抑制の指示だけで問題が解決されることがほとんどない臨床現場での実情を踏まえると、反復的・持続的な反すうを生む原因を特定することが重要である、という考え方がなされやすい。

反すう研究が本格的に開始された当初より、反すうは他の認知・感情・行動の反応や環境との相互作用により持続していると考えられてきた。15年前には、反すうは強固に保持されるメタ認知的信念が活性化された結果、方略として選択された反応であるという提案がなされた。過去10年間の反すう研究では、反すうの原因として実行機能の障害を仮定したものが多く、更に、思考は心的イメージよりも感情との結びつきが弱く、反すうを初めとする反復性思考は不快なイメージを回避する手段であるという説も提唱されている。

もし特性的な反すうを増加させる個人差要因が存

在するのであれば、その要因の改善こそが反すうの頻度・持続時間の減少を導くと考えられる。また、反すうとは異なる反応を繰り返し練習し、その習慣化を促すことにより、抑うつ気分喚起場面において反すうが生じにくくなるだろう。臨床現場において、認知行動療法家はこのような考え方に基づいて反すうの問題にアプローチする。しかし、反すうの意図的な抑制のみでは不十分である、という明確な根拠がない点に注意が必要である。

2.2. 思考抑制の成否の検討：皮肉過程理論に基づいて

田戸岡好香（東京大学・日本学術振興会）

私たちは失敗経験やネガティブな出来事を考えないようにしようと抑制することがある。しかしそうした試みに反して、抑制することでかえってそうした思考が思い浮かびやすくなってしまふことがある。こうした現象は思考抑制後のリバウンド効果とよばれ、社会心理学分野において、様々な題材を用いて繰り返し示されている (Wegner, 1994)。さらにこうした望まない思考における逆説的な効果は、対人関係にも影を落とす。平等主義的な規範から、他者をステレオタイプや偏見の目で見ないようにしようと思ふことがあるが、思考と同様に、ステレオタイプを抑制することで、ステレオタイプの判断や行動が増加することがある (Macrae, Bodenhausen, Milne, & Jetten, 1994)。本発表では、こうしたリバウンド効果がなぜ生起するのかを、皮肉過程理論に基づいて説明する。こうしたメカニズムに基づき、抑制の成否を分ける要因や、成功に導く方略について概観していく。また、思考抑制研究で用いられている方略をステレオタイプ抑制にも適用できるのか、という点に関しても展望と議論を行う。

引用文献

- Macrae, C. N., Bodenhausen, G. V., Milne, A.B., & Jetten, J. (1994). Out of mind but back in sight: Stereotypes on the rebound. *Journal of Personality and Social Psychology*, 67, 808-817.
- Wegner, D. M. (1994). Ironic processes of mental

control. *Psychology Review*, 101, 34-52.

2.3. 記憶の意図的抑制の成否と個人差

小林正法（関西学院大学）

本発表では、抑制対象を意図的に思い出さないようにすることで、抑制対象の忘却が生じる現象である Think/No-Think 課題による意図的抑制 (Anderson & Green, 2001) を中心に、記憶の抑制に関する基礎的な知見を取り上げた後、記憶の抑制能力の個人差について紹介し、我々が忘れたい出来事を意図的に忘れることができるのかを認知心理学の立場から考えていきたい。

これまでの研究から、ネガティブ画像 (e.g., Catarino et al., 2015) などの様々な記憶の抑制が可能だと示されている。しかしながら、記憶の抑制能力には個人差がある。例えば、PTSD 臨床群はネガティブ記憶の意図的抑制が困難であり、健常者においても思考制御能力の自己評価の低さは抑制の困難さと関連するとされる (Catarino et al., 2015)。

以上のような知見を紹介した上で、抑制能力の個人差が生じる原因や抑制の促進方法について論じていきたい。

引用文献

- Anderson, M. C., & Green, C. (2001). Suppressing unwanted memories by executive control. *Nature*, 410, 366-368.
- Catarino, A., Kupper, C. S., Werner-Seidler, A., Dalgleish, T., & Anderson, M. C. (2015). Failing to Forget: Inhibitory-Control Deficits Compromise Memory Suppression in Posttraumatic Stress Disorder. *Psychological Science*, 26, 604-616.

自己制御不全から紐解くダークパーソナリティ

—Dark Triad は本当に Triad か?—

- 企画 : 川本哲也 (日本学術振興会・慶應義塾大学文学部)
増井啓太 (追手門学院大学心理学部)
司会 : 川本哲也 (日本学術振興会・慶應義塾大学文学部)
話題提供者 : 田村紋女 (広島大学大学院総合科学研究科)
喜入 暁 (法政大学大学院人文科学研究科)
下司忠大 (早稲田大学大学院文学研究科)
増井啓太 (追手門学院大学心理学部)
指定討論者 : 吉澤寛之 (岐阜大学大学院教育学研究科)

1. 企画主旨

近年, “社会的に嫌がられる” パーソナリティとして Dark Triad が注目を集めている (Paulhus, 2014)。Dark Triad に含まれるナルシシズム・マキャベリアニズム・サイコパシーは, 他者への冷淡さや支配性, 衝動性を核とするパーソナリティの一群で, 我々の意思決定や対人行動, 進化的適応などに大きな影響を及ぼす (e.g., Jonason, Valentine, Li, & Harbeson, 2011)。

これまでの Dark Triad に関する研究では, 3つのパーソナリティが示す共通性が強調されることが多く, 時には3つのパーソナリティから Global Dark Triad 指標を抽出し, 変数として用いることもなされてきた (e.g., Jonason, Li, & Teicher, 2010)。その一方で, Dark Triad に含まれる各特性は, それぞれ独自の特徴も有している。しかし, Dark Triad 各々の相違点や弁別可能性, Dark Triad に含まれる各パーソナリティの独自性に関する議論はごく限られたものにとどまっている。本シンポジウムでは, Dark Triad 理解のカギとなる自己制御不全に着目し, パーソナリティ心理学, 社会心理学, 認知心理学といった様々な領域からの知見提供を通じて Dark Triad の相違点, および弁別可能性について議論を深めていきたい。

引用文献

- Jonason, P. K., Li, N. P., & Teicher, E. A. (2010). Who is James Bond?: The Dark Triad as an agentic social style. *Individual Differences Research*, 8, 111–120.
- Jonason, P. K., Valentine, K. A., Li, N. P., & Harbeson, C. L. (2011). Mate-selection and the Dark Triad: Facilitating a short-term mating strategy and creating a volatile

environment. *Personality and Individual Differences*, 51, 759–763.

- Paulhus, D. L. (2014). Toward a taxonomy of dark personalities. *Current Directions in Psychological Science*, 23, 421–426.

2. 話題提供者の要旨

2.1. Dark Triad と自己制御の関連

田村紋女 (広島大学大学院総合科学研究科)

Dark Triad の高い人は, 衝動性が高く, 自己制御が困難であると考えられている。特に, サイコパシーはさまざまな衝動性や自己制御の指標と負の関連を示す (Jonason & Tost, 2010; Malesza & Ostaszewski, 2016)。一方で, マキャベリアニズムと自己愛傾向については, 一貫した結果が得られていない。さらに, 主観指標に基づいた質問紙と, 行動指標による実験課題の指標間ではほとんど関連がみられないため, 異なる側面を測定していると考えられる (Malesza & Ostaszewski, 2016)。本発表でも, 自己制御について質問紙と実験課題の双方を用いて測定した結果を報告する。そして, 先行研究の知見と合わせて, Dark Triad における自己制御の相違点について議論していきたい。

引用文献

- Jonason, P., K., & Tost, J. (2010). I just cannot control myself: The Dark Triad and self-control. *Personality and Individual Differences*, 49, 611–615.
- Malesza, M. & Ostaszewski, P. (2016). Dark side of impulsivity: Associations between the Dark Triad, self-

report and behavioral measures of impulsivity. *Personality and Individual Differences*, 88, 197–201.

2.2. Dark Triad は親密なパートナーに対して暴力を振るうのか?

喜入 暁 (法政大学大学院人文科学研究科)

社会的な問題として、親密なパートナーに対する暴力 (Intimate Partner Violence: IPV) が挙げられる。この問題について多くのリスクファクターが挙げられており、パーソナリティではサイコパシー (Swogger et al., 2007), ナルシズム (Ryan et al., 2008) についてそれぞれ IPV と正の関連が示されている。しかし、これらの関連は Dark Triad として共通するものなのか、各側面に特有なものであるのかは明らかにされているとは言い難い。そのため、本研究では、Dark Triad が IPV のリスクファクターとして、どのように関連するのかを検討した。分析の結果、Dark Triad 傾向は IPV と正の関連を示した。しかし、Dark Triad の各側面を説明変数とした場合には、サイコパシーがその他 2 つの側面よりも強く関連した。また、ナルシズムは直接暴力と正の関連が示された。マキャベリアニズムは IPV との有意な関連は示されなかった。これらの差異について議論し、Dark Triad の共通性、特異性について理解を深めていきたい。

引用文献

Ryan, K. M., Weikel, K., & Sprechini, G. (2008). Gender differences in narcissism and courtship violence in dating couples. *Sex Roles*, 58, 802–813.

Swogger, M. T., Walsh, Z., & Kosson, D. S. (2007). Domestic violence and psychopathic traits: Distinguishing the antisocial batterer from other antisocial offenders. *Aggressive Behavior*, 33, 1–8.

2.3. コーピング・スタイルにおける Dark Triad の相違点 —日本語版 Brief COPE を用いた検討—

下司忠大 (早稲田大学大学院文学研究科)

自己制御は Dark Triad の弁別性を示す上で重要な観点であり、Dark Triad の各特性間の自己制御の量的・質的な差異に関する研究はいくつか報告されている。また、自己制御は様々な行動傾向や心理特性との関連が示されていることから、Dark Triad の各特性は自己制御の差異に応じてそれぞれ異なった行動傾向や心理特性と関連

を示すことが考えられる。本発表では自己制御に深く関わる心理特性のひとつとしてコーピング・スタイルに注目する。Dark Triad と日本語版 Brief COPE (Carver, 1997; 大塚, 2008) との関連の検討、および先行研究 (Birkás, Gács, & Csathó, 2016) から、コーピング・スタイルにおける Dark Triad の相違点について論じていきたい。

引用文献

Birkás, B., Gács, B., & Csathó, Á. (2016). Keep calm and don't worry: Different Dark Triad traits predict distinct coping preferences. *Personality and Individual Differences*, 88, 134–138.

Carver, C. S. (1997). You want to measure coping but your protocol's too long: Consider the Brief COPE. *International Journal of Behavioral Medicine*, 4, 92–100.

大塚 泰正 (2008). 理論的作成方法によるコーピング尺度—— COPE —— 広島大学心理学研究, 8, 121–128.

2.4. 他者への印象の形成、およびその推移に及ぼす Dark Triad の影響

増井啓太 (追手門学院大学心理学部)

Dark Triad に含まれる 3 つのパーソナリティのうち、サイコパシーとマキャベリアニズム傾向の高い人は、自身のネガティブな情動反応の制御に困難を示す、すなわち情動制御機能が低いのに対し、自己愛性傾向の高い人は情動制御機能が高いことが明らかとなっている (e.g., Casey, Rogers, Burns, & Yiend, 2013)。情動制御は対人認知プロセスにおいても重要な役割を果たすことから、自己愛性傾向の高い人の対人認知プロセスはサイコパシーやマキャベリアニズムの高い人のそれと異なることが考えられる。本発表では、他者のポジティブな特徴、ネガティブな特徴を聞くことによって形成されるその人物への印象とその推移に及ぼす Dark Triad の影響について検討した実験結果を報告する。そして、Dark Triad に含まれる 3 つのパーソナリティの対人認知プロセスの相違点について、情動制御機能の違いから議論する。

引用文献

Casey, H., Rogers, R.D., Burns, T., & Yiend, J. (2013). Emotion regulation in psychopathy. *Biological Psychology*, 92, 541–548.

様々な holding の在り方 2

—holding における「失敗」の活かし方—

企画者：舛田亮太（山陽学園大学）・平野直己（北海道教育大学）

話題提供者：舛田亮太（山陽学園大学）、石田哲也（久留米大学）、小田部貴子（福岡工業大学）

指定討論者：平野直己（北海道教育大学）

1. 企画主旨

holding(抱えること)はD.W.Winnicottが提唱した概念である。母親が子どもの育児をおこなうように、対象者(クライアント)をほどよく抱え、支援することを意味する(Winnicott, 1965, 牛島監訳, 1977)。なお牛島(1977)ではholdingを「抱っこ」と訳されているが、その後の研究では「抱えること」と訳されることが多いため、本研究もそれに準じた。

Holdingの概念は、狭義の意味で用いるならば、厳格な訓練過程を経てライセンスを得た精神分析家による提供される週1回以上の心理面接のみに適用される。しかし、広義の意味でholdingの概念をとらえた場合、対象は面接室への来談者だけでなく、子ども、学生、地域住民など、様々な形で抱え方があると思われる。舛田他(2015)では、さまざまな機関で実践を行う研究者が支援活動とholdingの関係について発表し、holdingの環境が整うプロセスや条件について、活発な議論が展開された。

今回の自主シンポジウムでは、「holdingにおける失敗の活かし方」をテーマに更なる議論を重ねたい。Winnicottは、holdingの在り方として、good enough mother(ほどよい母親)を提唱している。good enough motherとは、母親が子育てを行う際に、完全な育児ではなく、むしろある程度の失敗を受容し、活用していくことで子どもの成長が促進されることを意味する。この概念は、Winnicottが環境を非常に重視していること、解釈も「そもそも自分の理解の限界を相手に知らせるために伝える」というパラドックスを受け入れることを重視していることが理論的基盤とされている。

しかしある一定の限度を超えると、それは「侵襲impingement」となり、病理的な「偽りの自己」を形成してしまうことにつながる。館(2013)は、侵襲の結果、偽りの自己と本当の自己は本来どの人間にもある

こと、健康度が高い場合は「偽りの自己」が適応的に働くこと、病理的な場合には偽りの自己がパーソナリティの全体を覆いつくすことになり、自分自身で本当の自己に到達することは不可能になる、と説明する。

Good enough motherに関する議論も、本来であれば無意識の存在を取り扱う精神分析療法、もしくは精神分析的心理療法のみには通常は限定される。一方で、それらの心理療法を行うことが困難である教育、福祉、医療、矯正等の機関においても、holdingにおける失敗の活用を検討していくことは、さまざまな制約がある中で、対象の援助に関し、CIを援助していく現実的な環境では重要なことと思われる。

もちろん、これらの議論の際には妙木(2010)の「週4回以上人と付き合う、抱えることをしているのではないのでは短期で終わることの意味も違う」といった意見を踏まえる必要がある。holdingにおける失敗の活用は、精神分析や精神分析的な心理療法に適用される概念であること(P.Casement, 2002, 松木監訳, 2004)を前提としながらも、今回のシンポでは、1.各現場でどのように援助における失敗を活かし、よりよいholding環境をどのように構築するか、2.そもそも適度な失敗を前提としたholdingを準備しておくにはどのようにすればよいのか、の2点を議論したい。本シンポジウムの対象は特になく、フロアのかながさまざまなフィールドの方々から積極的意見を頂き、議論を深めていきたい。引用文献

D.W.Winnicott(著)牛島定信(訳)(1977):「情緒発達の精神分析理論」岩崎学術出版社

館直彦(2013):「ウィニコットを学ぶ 対話することと創造すること」岩崎学術出版社

舛田亮太・平野直己・石田哲也・小田部貴子(2015)

パーソナリティ心理学会第24回大会シンポジウム: 様々な holding の在り方—抱えられる環境を作

るプロセス— パーソナリティ心理学会第 24 回大会発表論文集,p7-8.北海道教育大学

妙木浩之(2010):「初回面接入門—心理力動フォーミュレーション」岩崎学術出版社

P.Casement(著)松木邦裕(監訳)(2004):「あやまちから学ぶ 精神分析と心理療法での教義を超えて」岩崎学術出版社

※本シンポジウムで話題提供される臨床素材、実践事例は対象、機関から発表の許可を得ている。しかし、プライバシーの問題に考慮するため、以下の話題提供では大まかな趣旨を概説するにとどめる。

2. 話題提供者の要旨

2.1.holding における失敗の活用

—医療機関の場合— 舛田亮太(山陽学園大学)

本事例では、医療機関で行った支援例をもとに、holding における失敗の活用について検討したい。話題提供として、医療機関において週 1 回の心理面接を行った事例を検討する。事例の検討点は、面接過程の中でクライアントの通院アクセスの問題が生じ、他機関へ紹介することを前提としたケースマネジメントを余儀なくされた点である。北山(1993,2001)が提唱する橋渡し機能のように、クライアントが希望する他機関への転院も単なる紹介ではなく、解釈を中心とした言葉によりクライアントの内的世界を外界(他の医院、学校、地域社会など)につなげることが重要となる。

しかし様々な制約下において、クライアントの内的な世界を外界につなげながら、holding 環境を形成していくことは当然ながら困難なことであり、そこに失敗も生じやすくなる。本発表では、発表が体験した面接過程における失敗とその活用について、援助者側の転移、逆転移の問題も考慮しながら議論したい。

引用文献

北山 修(1993):言葉の橋渡し機能 —およびその壁
北山修著作集第 2 巻 岩崎学術出版社

北山 修(2001):幻滅論 みすず書房

2.2.holding における失敗の活用

—学生相談機関の場合— 石田哲也(久留米大学)

心理面接では、不合理な認知や不適切な行動の変容

を促すため、エビデンスに基づいた心理教育やワークを行うことがある。良好な治療関係を作りクライアントの主体性を重視してすすめていくが、治療者が教えクライアントが習うというスタンスになりやすい。この場合、治療者が理想化され複雑な感情を治療者に表出できて一時的に症状が軽快することがある。そうすると面接には足しげく通うものの改善や洞察は停滞してしまうことになりかねない。

また特に学生相談機関においては、学生の所属がなくなると相談を継続することはできないので、最初から回数や期間が限られたセッティングである場合も多い。こういった状況における面接を振り返る際に、holding の失敗という概念は有用な示唆を与えてくれる。発表では事例を提示し、治療者の失敗を契機に面接が展開する流れを考察したい。

2.3. 大学の授業運営における holding の失敗の活用

—高等教育機関の場合—小田部貴子(福岡工業大学)

高等教育機関においては、近年、アクティブ・ラーニングが盛んに行われるようになり、他者とのディスカッションやグループ活動は欠かせない要素となってきた。しかし、学生の中には、人接することに苦手意識がある、他者からの批判的意見への脆弱性が高い、発達障害など特別な配慮を必要とする者が一定数存在する。筆者の発表ではまず、本学ならびに筆者が行っている、学生への基本的な配慮を簡単に紹介する。ここで、現在の体制は“そもそも失敗することを仮定”したものであり、この holding 環境の考え方や体制が整えられてきたプロセスについても触れたい。そのうえで、筆者がこれまでに体験した失敗例を示し、①当該学生のフォローとしての活用、②当該クラス運営における教育的な活用、③大学としての体制づくりへの活用という 3 つの観点から、何ができるかについて議論したい。さらに、大学という機関ではその性質上、holding の失敗は“失敗”は活かされることが少なく“個々の問題”として片付けられやすい。しかし、そこで生じる学生たちの“違和感”，あるいは場合によっては“傷つき”を見逃さずに活用することで、学生の自己理解や人間的成長を促す機会となり得ることを踏まえ、私たちにできることや holding における失敗の捉え方について改めて考える機会としたい。